

Title	VTuberの炎上メカニズム解析
Author(s)	笹部, 航一
Citation	
Issue Date	2024-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/18942">http://hdl.handle.net/10119/18942</a>
Rights	
Description	Supervisor: 西村 拓一, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

修士論文

題目 VTuber の炎上メカニズム解析

著書名 笹部 航一

主指導教員 西村 拓一

北陸先端科学技術大学院大学  
先端科学技術研究科  
(知識科学)

令和6年3月

## Abstract

Modern society is overloaded with information, which is attributed to the development of the internet and social networking services. Along with the proliferation of smartphones, the development of social networking services has led to an increase in criticism and the spread of a phenomenon known as 'flames' in society. VTubers are particularly influential, and their popularity and visibility make them vulnerable to flaming, which can lead to psychological problems and even retirement.

Previous studies have analysed the reality of flames and the mechanisms of web flaming, focusing on the rapid growth of online flames and their main venue - Twitter; studies that organise past events related to VTubers and predict their future prospects; and studies that investigate the impression of VTubers' and YouTubers' delivery styles on the audience. However, there are several definitions of the term 'VTuber' and a new term 'V-liver' has emerged. Therefore, the aim of this study is to first clearly define VTubers, re-examine the definition of flaming, and build a model that shows the expansion and contraction of flaming based on past cases of flaming.

As a result, VTubers were defined as distributors with avatars and personalities whose main source of income was YouTube. Flame case was defined as a Twitter search for 'VTuber name flame' with several hundred posts. These flame cases were modelled to create a typology of VTuber flaming: unlike other types of flaming, VTuber flaming tends to persist over a long period of time and does not subside after an apology. Video clips have a strong influence, with factually incorrect and malicious clips fuelling the flames, and fan rebuttals contributing to the flames. In addition, due to the unique "reincarnation" culture of VTubers, it is easy for them to resume their careers after retirement, which means that flames often linger long after retirement. VTubers have a unique culture and more confidentiality of information than other distributors, and this specificity is responsible for a large part of the flames. With an understanding of this specificity, we will continue to look for ways to develop and mitigate the risk of flames.

## 目次

第1章 序論 .....	1
1.1 研究背景 .....	1
1.1.1 情報化社会での問題 .....	1
1.1.2 炎上という社会問題 .....	1
1.1.3 先行研究の炎上定義 .....	3
1.1.4 YouTuber・VTuber の出現 .....	3
1.2 研究目的 .....	4
第2章 関連動向調査分析と問題点・課題の提示 .....	5
2.1 先行研究 .....	5
2.1.1 炎上をめぐる議論 .....	5
2.1.2 アバターをめぐる議論 .....	6
2.1.3 VTuber をめぐる議論 .....	6
2.2 課題と仮説 .....	7
2.2.1 現在の問題点 .....	7
2.2.2 研究の仮説 .....	8
第3章 研究手法 .....	9
3.1 文献研究 .....	9
3.2 事例研究 .....	9
第4章 結果 .....	9
4.1 定義づけ .....	9
4.2 炎上モデル .....	13
第5章 考察 .....	19
5.1 炎上モデルについて .....	19
5.2 VTuber の特異性 .....	24
5.3 今後の課題と展望 .....	25
謝辞 .....	25

## 図目次

図 1 VTuber と関連職業の定義図 .....	11
図 2 VTuber と V ライバーの違い .....	12
図 3 炎上モデル I .....	14
図 4 炎上モデル II .....	15
図 5 炎上モデル III .....	16
図 6 炎上モデル IV .....	17
図 7 炎上モデル V .....	18

## 表目次

表 1 炎上起点の分類分け .....	20
表 2 VTuber 炎上の類型化 .....	20
表 3 炎上モデルの場合分け .....	20

# 第1章 序論

## 1.1 研究背景

### 1.1.1 情報化社会での問題

現在、世の中には多くの情報があふれている。この情報化社会を作ったのは、インターネット環境の発展とスマートフォンの普及、ソーシャルネットワーキングサービス通称 SNS の発展などがあげられる。総務省の調査によると 2010 年にインターネット利用者の接続数がパソコンよりもモバイル端末が増えている、さらに NTT ドコモの調査で携帯電話とスマートフォンの所有動向にて 2010 年は 4.4% だったスマホ所有率が現在 2023 年は 96.3% にもなり、たった 10 数年で急速に普及している [1]。

そのため、現状スマートフォンを使用しない生活は難しく、いつでもだれでも情報を得ることが当たり前の世の中になったといえる。さらに SNS の登場とユーザー数の増加によってインターネット上のコミュニケーションが簡単になり、情報収集の手段の一つとして現在 SNS は幅広く活用されている。しかし、SNS の発展に伴い、いろいろな課題も浮かび上がっている。例えば特定の人物や組織、事柄に対して批判が多く集まる「炎上」は当事者のみに限らず、社会にも影響を与えている。またインターネット上で行われるいやがらせ、脅迫、ストーキング、なりすましといった暴力の総称として「デジタル暴力」といった用語も生まれている。

また日本だけでなく韓国やドイツ、アメリカなどの海外でも SNS 上の誹謗中傷は問題となっており、国際社会を見ても社会問題になっているといえるだろう。

### 1.1.2 炎上という社会問題

今では百科事典で「炎上」と調べると、その意味の中に『発信した情報が大勢の受信者の怒りを買って、発信者のブログや SNS といったネット上のアカウントに大量のコメントが送られるなどすることを意味するネット用語。特に悪意のあるものは「荒らし」などとも呼ばれる。一般的には不謹慎な発言をした著名人などのブログや SNS が「炎上」することが多い』 [2] と書かれ、一般に定着している。しかし当初は電子掲示板 2ちゃんねる内の出来事、トピックの一つだった。炎上の起源を定義するのは難しいが、炎上は何を表しているのか、当時の事例を見ながら論述していく。炎上という言葉が使われるようになった

のは平井（2012） [3]では 2005 年 8 月に起きた「きんもーっ☆事件」ではないかとされている。この事件はコミックマーケット 68 にて付近の飲食店でアルバイトしていた大学生が、自身のブログでオタクを写真付きで「きもい！」と書き込んだ。その後 2ちゃんねるやまとめサイトでスレッドができ大きな話題となった。その上、投稿者個人の写真や文章が多く、特定が簡単だったため騒動が大きくなったと考えられている。最終的にブログは閉鎖され飲食店への被害も多く大事になってしまった。この事件のあとブログ炎上が頻繁に起き、認知が広まったと考えられる。

しかし、当時はスマートフォンが普及する前だったので炎上といえばブログ炎上を指す言葉だった。またこれ以前の炎上は〇〇祭りと呼ばれるケースが多かったため、炎上が現在の意味を持つようになった起源は 2005 年から 2008 年にあるとされている。2011 年から 2012 年はステルスマーケティングを行っていた芸能人が多く炎上件数は大幅に増加した。有名な事例として 2012 年のペニーオークション詐欺事件である。その中で商品を落札していないのに落札したと装いサイトを紹介していたため「ステマ」が発覚した。この事件のあと日本では近年の 2023 年 9 月 30 日まで法規制がなかったので「やらせ」や「さくら」が横行していた。また、この時期から芸能人のブログ炎上ではなく一般人の炎上事例も発生するようになった。2011 年 1 月ホテルのアルバイトが芸能人の来店を Twitter で投稿し、批判が集まった。そのほかにも虐待を思わせる動画を投稿するケースや他人のなりすましによる嫌がらせのケースも出てきた。またこれらの投稿に対して投稿者が誰なのか特定する動きが起りさらに話題になった。2013 年には従業員が業務上不適切な行動をしている写真を SNS 上に投稿する「バイトテロ」が多発した。コンビニのアルバイトがアイス用冷凍庫に入った写真を投稿し話題になってからいろいろな店舗で不適切行動を行っている事例が投稿された。この時期から写真を載せている投稿が多くなり、投稿を見ている人によりインパクトを与え、多くの人が炎上した店舗の利用を避け店舗が破産に追い込まれるケースもあり、社会問題として取り上げられるようになった。

2011 年以降は SNS の発展により一般人の炎上が増えたが、2014 年からは企業の炎上が目立った。企業アカウントでの不適切投稿や CM をはじめとした広告の批判などがあげられるがこの時の炎上には過去の炎上と違い、批判されるだけではなく批判意見に対する反論もあったため、話題がさらに大きくなりさ



らに多くの人に知られるといった構図を生み出した。2017年からは YouTuber の台頭により、芸能人ではない一般人が注目される世の中になり、そのことで人気 YouTuber の炎上や保育やジェンダーといった日本の社会問題に意見する炎上が多く出てきた。そのことにより今までの炎上は批判だけが集まるケースが主流だったが、炎上内容に関して議論され、国会答弁等でも取り上げられるようになった。これまでは炎上しやすい繊細な話題を避けることが炎上リスクの回避になっていたが、近年では様々な発言について指摘され炎上するケースが多くなっており、対策は講じにくいものとなっている。そのため、誰もが炎上被害者になる可能性がある社会になったといえる。

### 1.1.3 先行研究の炎上定義

年々社会問題になっている炎上だが、炎上という言葉に明確な定義はなく、ニュースやまとめサイト、SNS の投稿によって定義がバラバラである。一般的に使用されている炎上と、研究されている炎上に関してどう違うのか認識するために炎上に関する研究を調べた。平井 (2012) [3]では『ブログ、ミクシィ (mixi)、ツイッター (Twitter) などに投稿されたメッセージ内容、ならびに投稿者に対して批判や非難が巻き起こる現象』と定義されていて、また萩上 (2007) [4]では『WEB 上の掲示板等において非難の投稿が殺到する状態』と定義されている。さらに吉野 (2018) [5]では『短時間のうちに大量の批判がソーシャルメディアなど CGM に書き込まれること、単一のネットサービスのみではなく複数のネットサービスに批判が広がること』と定義されている。しかし実際には大量の批判が集まらずとも炎上という言葉が使われるケースは多く、先行研究の定義に当てはまらない炎上も増えてきている。サイトによっては批判が多く集まっていないが「炎上」と記載することによって閲覧数が増えるといった話題性や売名行為の一環として「炎上」という言葉を使用するケースもでてきた。

### 1.1.4 YouTuber・VTuber の出現

当初の炎上は芸能人や閣僚関係者といった限られた人が対象者になっていたが現在ではだれでも炎上するリスクがある。しかし影響力のある人のほうが炎上の可能性は高くなる。その中でも近年 YouTuber の影響力はますます大きくなっている。加えて VTuber といったアバターを使用した配信者は日本を中心に世界中で人気を有し、2020年にはアイドルであるけやき坂 46 に匹敵する検索人気度を出している。しかし知名度が高くなったことでトラブルも増え、配信

中の発言や X（旧 Twitter：以下 Twitter と表す）での発言がもとに批判が殺到するケースが出てきた。中にはアバターの否定や配信者に対する誹謗中傷の場合もあり精神病になるケースも少なくなく VTuber 業界の炎上は大きな問題になっている。例えば 2023 年 3 月にじさんじ所属の郡道美玲が WBC 決勝戦の観戦を Twitter で実況し『これ玉投げる人、強い人が立った時に頭か身体に投げちゃえば出場停止にできるんじゃないの?』と投稿し批判が殺到。その後謝罪したものの過去の発言がキャラ設定にそぐわないものだとされさらに批判が集まりその後引退した。またにじさんじ所属の御伽原江良が配信を地声で行い、キャラのイメージを悪化させたとして数か月後批判が集まり引退するといったケースもある。VTuber 含め YouTuber 等の動画投稿者は幅広い視聴者とリアルタイムで拡散されることから話題になりやすい。その中でも VTuber はアバターを使用しているため、アバターに対する批判や動画投稿者の匿名性が高いこと、ファンの熱が高いといった理由からほかの動画配信者よりも話題になりやすく最近では毎日のように VTuber の投稿がリアルタイムで拡散され話題になり、ネットニュースで扱われることが多い。

## 1.2 研究目的

本研究では近年 SNS の話題に上がりやすい動画投稿者の中でも VTuber に焦点を当て、VTuber の炎上事例から炎上モデルの作成を目指す。VTuber の炎上に関する研究は今までにないため、炎上の先行研究から VTuber の炎上に合う定義を作成し、時系列で炎上がどのように進んでいくのか先行研究の炎上モデルと異なるのかを分析することが本研究の目的である。本研究では炎上事例の関連ツイートやまとめサイトから情報を取り分析を行う。これは炎上の起点となったデータは削除されており、匿名性が高いため当事者とのコンタクトは難しくインタビューは実施できないと考えたからである。またまとめサイトや関連ツイートでは間違っただけの情報を使用されているケースがあるが、それについては複数のサイトや関連ツイートへの返信を見ることで解消できると考えた。

## 第2章 関連動向調査分析と問題点・課題の提示

### 2.1 先行研究

#### 2.1.1 炎上をめぐる議論

平井（2012） [3]ではウェブで炎上がどのように発生するのかという問題について日本のウェブ文化から分析している。その過程で過去の炎上事例を時系列で整理し、フレーミングと炎上の違いを明らかにした。この論文では炎上の起源は祭りと呼ばれる現象にあるとされている。祭りとは2ちゃんねるの特定のスレッドが一つの話で盛り上がっていることで話題の継続性や他サイトへの展開といった面で炎上と似通った部分があるとされた。またフレーミングに関しては『コンピュータによって媒介されたコミュニケーション（以下、CMC）における敵対的で攻撃的な相互行為』 [6]と定義されていて不特定多数のユーザーが集まるオンラインサービスでよく起こっていた。炎上の引き金となった投稿は他人を批判する発言や問題の投稿に対して投稿者を罵倒する言葉が見られ、炎上はフレーミングの一種と考えられているが、炎上の場合投稿者と批判者の間だけでなく第三者が絡むことによって、当事者同士のいさかいではなくなっていると述べられている。そのためこの論文では炎上はフレーミングとも祭りとも類似している現象であるが区別してとらえる必要があるとしている。また山口（2015） [7]ではネット炎上の実態と特徴を整理した後政策的対応の考察を行っている。この論文では批判的な意見が集中する現象はインターネットの普及前にも存在していたが、それらは拡散力の違い、情報発信の容易化、批判の可視化といった複数の点で近年の炎上事例と違うと述べられている。また炎上の実態に関しては2011年以降急増していて年200件以上起こっている。その40%がTwitterで起こっておりこれは友達同士でつながるFacebookよりもオープンなソーシャルメディアだからとされている。またインターネット上で非難してもいいと考えている人は10%しかおらず、その人達は炎上に加担したことがある人が多いということも分かり、ごく一部のネットユーザーが毎年200件程度の炎上を発生させネットは怖いというイメージを抱かせていることが分かったと述べられている。

### 2.1.2 アバターをめぐる議論

アバターのデザイン、動作、使用方法が人々にどのような影響を与えるのか様々なテーマで研究されている。

清水・渡邊（2021） [8]ではアバターの表情と印象の関係を明らかにしている。この論文ではアバターの動きの有無による印象の変化を SD 法で分析しアバターが動くことによって味わいがあると考え人が多くなり印象に変化が起こっていることが分かった。またアバターの外見の違いからどういったイメージを持たれるのか SD 法を使用しクラスター分析した。その結果、それぞれのアバターに合った動きをすることによって受け手がどのような印象を受けるのかの手がかりを示した。

また市野・井出・横山ら（2022） [9]はアバターを使用することで人々が自分自身のことをより多く話す傾向にあることを明らかにした。ここでは実験で対話を行ってもらい、そのデータから自己開示を評価した。またアンケートを行い主観的な反応のデータも取り分析するとアバターを使用したほうが多くのことを話してしまっただが、アバターとビデオチャット条件間で主観的な体験に差がなかったことが分かった。そのためアバターを使用したほうが多くのことを話しやすくなると明らかにした。

### 2.1.3 VTuber をめぐる議論

哲学的視点から VTuber について考察しているものや VTuber のエポックイベントとその意味について検討しているもの、VTuber の人格権や著作権に関した論文などが出ている。

西野（2022） [10]では VTuber が有名になるまでの特徴的なポジティブイベントに焦点を当てどのようなことが起きたのか明確にし今後の発展の予測を行った。そこでは 2017 年 12 月 KIZNA AI が YouTube 登録者 100 万人を突破し YouTuber の中でバーチャル YouTuber というカテゴリーが社会的に認知された。その後すぐ 2018 年 1 月にねこます氏が「バーチャルのじゃろり狐娘 YouTuber おじさん」としてデビューし一般市民への VTuber 認知を広げた。2018 年、2019 年と多くの YouTuber が存在する中スーパーチャット総額 1 位に VTuber の因幡はねるがなり世界に VTuber の存在が知られ、同時接続数 2 万の桐生ココや海外進出のガウルグラと次々に発展していった。現在ではサブカルチャーの一つながらスーパーチャットで数億円稼ぎ、専門企業が時価総額

で旧来企業を超えるなどと文化的にも経済的にも無視できなくなっていると述べられた。

また越後・呉・新井ら（2022） [11]では VTuber と YouTuber の配信スタイルによって人の印象の違いを調査した。それぞれの配信スタイルで3つのカテゴリーに所属する動画を作成し実験参加者に見てもらいアンケートでどのような印象を持ったか回答してもらった。その結果2D アバターを使用した場合は表情や目線といったノンバーバル情報の評価値が低く、先行研究と違った結果になったがデフォルメが実写配信者に極力似ているように作成したからだと考察していた。これらの結果からこの論文では動画カテゴリーによっては配信者の反応や説明などの内容の印象と視覚聴覚的な印象にかかわる要素が視聴者の印象に影響を与える可能性があるということが分かった。

佐藤（2021） [12]は VTuber の定義に関してイメージと身体の点で論じており、VTuber を3D アニメーションとして位置づけ VTuber の核となっているものはキャラクター設定でありアクターの人間らしさではない。しかし視聴者はアクターに対しても興味を抱き VTuber のキャラとアクターの関係が崩れることを拒絶する。2D モデルの場合、キャラクターに関してアクターが強い影響を与えるため、生々しいキャラクターになっているがそのようなファンの幻視によって VTuber の特徴であると考えられる。ただ現在モーションキャプチャーが一般化しイメージの裏側を暴露する意味も減り VTuber ではアクターの存在は常識になってしまった。その中でも VTuber が人気なのは生命を吹き込まれたアニメーションとして見ることができるからと論じられている。

## 2.2 課題と仮説

### 2.2.1 現在の問題点

現在炎上という言葉は研究者によって定義がさまざまであり、VTuber の炎上の定義は定まっていない。そのため炎上の先行研究でどのように定義されていたのかまとめてみた。

平井（2012） [3]では『ブログ、ミクシィ（mixi）、ツイッター（Twitter）などに投稿された

メッセージ内容、ならびに投稿者に対して批判や非難が巻き起こる現象』とされ萩上（2007） [4]は『ウェブ上の特定の対象に対して批判が殺到し、収まりがつかないような状態』としている。他にも吉野（2018） [5]では炎上の特徴と

して『(1) 複数のネットサービスやメディアに跨って批判が広がり、その結果、ネットニュースやまとめサイトに「炎上」として紹介されること、(2) ネット上での集合行動として捉えられること、(3) ネット発の社会運動との違いとして、論理的な議論や批判ではなく、憎悪・侮蔑など感情的・攻撃的なトーンが特徴となっていること』とあり、そこから定義では『短時間のうちに大量の批判がソーシャルメディアなど CGM に書き込まれること、単一のネットサービスのみにだけでなく複数のネットサービスに批判が広がること』としている。

実際に炎上件数を測定するときには吉野 (2018) [5]では「2ちゃんねる」と「ログ速」といわれるネット掲示板で「炎上」のタグが付いていたスレッドを数え測定している。また株式会社エルテスがカウントしている炎上事例データベース「エルテスクラウド」を使用している論文も多い。「エルテスクラウド」での炎上定義 [13]は『特定のまとめサイトの記事が Twitter で 50 回以上リツイートされた』事例とされている。

このことから先行研究では社会に認知されるレベルの炎上事例を対象にしていると考えられるが、そのレベルに至らなくとも批判が集まり職を失う者や精神を病む者も出てきている。その中でも VTuber は今までのケースとは違い、アバターを使用することで独自のキャラ設定と「中の人」の差異が生まれやすくまたアイドル同様の文化も見られるため先行研究の定義には合わないのではないかと考えている。

### 2.2.2 研究の仮説

問題点から以下の内容を本論文の仮説とする。

- 1.VTuber の炎上は先行研究の炎上定義には合わない
- 2.VTuber の炎上は数時間という短時間では起きない

仮説 1 は VTuber 業界のルールや環境、アバターの使用等に焦点を当てて再定義する必要があると考えたからだ。仮説 2 は VTuber の炎上事例として起点となるのは動画内での発言が多くまたライブ配信の活動が主で常に見ている人はそこまで多くないと考えた。そのため動画の切り抜きが SNS 等で拡散されてから炎上になっているのではと思い仮説 2 を立て、時系列順に VTuber の炎上

事例の炎上モデルを作成することで VTuber の独自の炎上要因の分析を行いたい。

## 第3章 研究手法

### 3.1 文献研究

炎上の定義に関しての情報を集めるため、J-STRAGE の詳細検索で「炎上」と調べブログ炎上ではなく Twitter 等の SNS 炎上に関するものとして 2011 年以降を検索範囲とした。検索された文献から炎上の定義と炎上件数の調査項目について 20 件を今回の分析対象とした。

同様に VTuber についても詳細検索で「VTuber」と調べ検索された文献の中から 20 件を今回の分析対象とした。また検索期間として VTuber が大きく発展後、様々な形態が出てきたため、2020 年以降の論文から選択した。VTuber の定義や関連する情報を分析する。

### 3.2 事例研究

上記の文献研究で新たに作った定義に合う過去の炎上事例を 5 件分析する。2020 年以降の炎上事例の中から多数のサイトで掲載があるものを選び、また情報が多く残っているものを選択した。炎上したきっかけから炎上するまでの道なり、炎上してからの行動をまとめサイトやブログ、Twitter の関連ツイートを使用し炎上モデルを作成する。

## 第4章 結果

### 4.1 定義づけ

VTuber の定義に関して難波・大澤 (2023) [14]では『2D あるいは 3D のイラストやアバタを用いた配信者・動画投稿者である。バーチャル YouTuber という呼称自体は 2016 年 12 月に『AI』を自称する CG キャラクターとして YouTube に登場したキズナアイが初めて呼称した名前であり YouTuber の活動をバーチャルに行うという意味が含まれていた。これ以外に VTuber や Virtual Being という呼び名もある。また近年は AIVTuber といった試みも盛

んであり、これらすべてを VTuber と呼称する』とされている。また武田・濱崎 (2019) [15]では『VTuber とは、バーチャルと YouTuber を合わせたもので3Dモデルやイラストで表現されたキャラクターで動画を投稿している。』とある。また自ら VTuber 活動を行っている北川 (2023) [16]は『VTuber というのは、アニメに出てくるような、バーチャルなキャラクターによる動画投稿者または生配信者のこと』といている。これらの論文以外にも VTuber は『動画配信ソフトで外見がコンピュータグラフィックスであるキャラクターのこと』 [17] [18]とあることが多く一般的だといえる。だが現状の定義だとアバターを使用した配信者すべてが対象になってしまう。そのため本論文ではこの定義をさらに細分化する。定義に関して図に表したものが図1である。まず図1の一番上にあるカテゴリーが動画配信者であり、YouTube や Mildom、ニコニコ動画と言った動画配信コンテンツに動画を投稿している人たちのことだ。次にアバターを使用した配信者と使用しない配信者に分かれる。アバターを使っていない配信者の中でも YouTube に投稿している配信者のことを YouTuber という。ニコニコ動画に投稿している人たちはニコニコ動画投稿者となり配信サイトごとで名前が変化する。ここでアバターを使用した配信者全体を指して VTuber といわれることが多い。先行研究ではこのケースがほとんどであったが本来 VTuber はバーチャル YouTuber であるため YouTube で動画投稿しているアバターを使用した配信者だ。現在ではその意味が薄れ YouTube 上ではなくとも VTuber というようになってしまった。本論文ではアバターを使用した配信者の中でも配信者の自我がある人とない人で分けていく。これはどういう意味なのかというと自分の意志で動画投稿ができるかどうかという面を見ている。図1のように配信者の自我がないパターンとしてアニメキャラを使用し動画投稿しているケースがあげられる。図1にあるのは「ばかチューブ」といわれるウマ娘のキャラクターであるゴールドシップが動画を投稿しているアカウントである。これはウマ娘公式が PR として作ったアカウントであるためゴールドシップを演じている声優の上田瞳が自分の意志で配信活動は行えない。例として他にはブルーアーカイブ公式チャンネル内のアロナがあげられる。配信者の自我がある人達でも二つに分けられる。それが図1の VTuber と V ライバーだ。V ライバーとはバーチャルキャラクターでライブ配信をする人といわれることが多い。ここで VTuber と V ライバーの違いを分かりにくくしている要因として V ライバーは上記に述べたようにライブ配信をする人なので



YouTube 上でライブ配信している場合、VTuber と区別がつかないのだ。詳しく見ていくといくつかの区別をつけることができる。その説明が図2である。図2のようにVライバーは名前に入っているようにライブ配信が主な活動である。そのため、17LIVE や IRIAM といったライブ配信アプリでの活動になる。ただいつもはライブ配信アプリで活動する V ライバーが YouTube 上で配信活動するケースもありその場合は一時的に VTuber と言えなくもないのだ。また YouTube チャンネルを確認していても VTuber と V ライバーの違いを明確にわかっていなく配信者側が間違えているケースもある。そのため今回の定義では VTuber は YouTube 上で主に配信活動をしていて収入源は YouTube が主とされると考えられるもの。かつ図1のようにアバターを使用した配信者で配信者の自我がある人達のことを指す。



図 1 VTuber と関連職業の定義図

VTuber	Vライバー
YouTubeやニコニコ動画と言った動画配信サイトで <b>配信活動</b> している人	IRIAMや17LIVEと言ったライブ配信サイトで <b>ライブ配信活動</b> している人
投稿しているコンテンツは人によって様々だがライブ配信以外にも <b>歌動画、TV番組</b> のようなものもある	投稿しているコンテンツは人によって様々だがほとんどが <b>ライブ配信</b> である
主な収入源が <b>広告収入</b>	主な収入源が <b>投げ銭と時給</b>

図 2 VTuber と V ライバーの違い

次に炎上に関して述べていく。炎上の定義について山口（2015） [7]は『ある人物や企業が発信した内容や行った行為について、ソーシャルメディアに批判的なコメントが殺到する現象を炎上と扱う』とし、論文上で炎上件数について調査する際はエルテス社の eltes Cloud を使用していた。エルテス社の炎上の定義 [13]として、『エルテス社が指定するまとめサイトに掲載され、かつ、Twitter の リツイート（RT）が 50 回以上されているもの』ということが分かっている。また別の論文である岸本（2020） [19]では『炎上とは違反行為や迷惑行為など不適切と感じられる投稿に関して、これを閲覧したものによる非難・中傷のような発言が殺到して収拾がつかなくなること』とされている。複数の論文を調べる中、炎上の意味としての定義はどの論文でも同意義であることが分かった [20] [21]。ただどれぐらいの批判が集まることで炎上となすのかは定義していることが少なかった。これに関しては炎上規模や事例によって様々なので定義しにくいからではないか。だが炎上件数を計測する場合の指標として使用されているのが炎上記事のリツイート回数やまとめ記事のタグに炎上とついているものであることが文献研究でわかった [5] [20]。本論文ではVTuber に特化した炎上定義の作成を行うため、VTuber が情報交換を行う Twitter の投稿数で炎上したか否かを判断する。動画投稿を行っているサイトである YouTube でのコメントに関しては調査しないものとする。その理由と

して配信内の発言で炎上した場合動画データが削除されコメントを把握することができなくなり、調査することができないからである。Twitter の投稿に関しても削除されるケースはあるが、まとめサイトやニュースサイトで取り上げられていることが多いため YouTube 上のコメントよりもデータ収集は簡単である。ではどのぐらい Twitter の投稿が増えたら炎上とみなすのかについてだが、これに関しては Twitter で「VTuber の名前 炎上」と検索し一つの事例に関して数百件の投稿が集まっていれば炎上していると定義する。VTuber は大量のフォロワーがいるが常にその VTuber に関して投稿している人たちは非常に少数である。通常時の投稿数に振れ幅も多く、イベントがある週と通常活動の週によっても変化が出てくる。そのためいつを通常時にすればいいのか難しい。加えて動画内の発言によって炎上しやすいのでツイートの投稿と違いリツイートが急増することもない。また VTuber 業界全体の文化として VTuber のツイートに関してリプライ等のコメントを残すことがタブーとなっている雰囲気もある。そのためツイートのリプライやリツイートに関しての基準を作るよりも関連ツイートの数を条件にした。

## 4.2 炎上モデル

上記で設定した定義をもとに炎上事例を 5 件選定し、その炎上モデルを作成した。それらが下記のものである。

### ケース I WBC 決勝での不適切発言

話題が話題だったこともあり大きな話題になった元にしさんじプロジェクト所属の郡道美玲の不適切発言による炎上を取り上げる。この事件の発端は 2023 年 3 月 22 日 WBC 決勝を Twitter で実況中、『これ玉投げる人、強い人が立った時に頭か体に投げちゃえば出場停止にできるんじゃないの?』と投稿した。Twitter での投稿だったためすぐに批判ツイートが集まり異例の事態となったためにしさんじを運営する ANYCOLOR 株式会社は 3 月 23 日に郡道美玲の謹慎処分を発表した。その後謹慎処分のまま 6 月 21 日に卒業を発表した。時系列で事実を並べると図 3 のようになる。

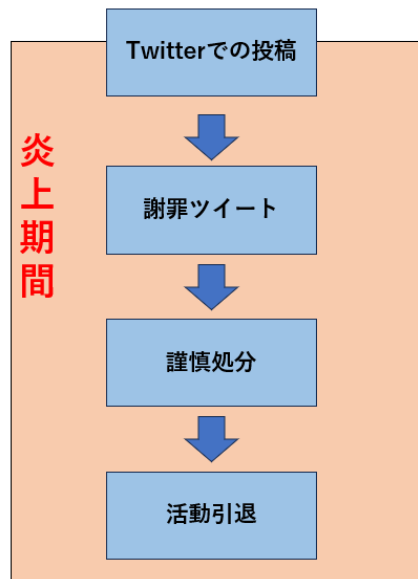


図 3 炎上モデル I

まず炎上の原因としては上記の Twitter での不適切発言になる。その後すぐに謝罪ツイートを行い、自分の非を認めまた実況後も再度謝罪ツイートを行った。しかし 22 日の試合後複数のネットニュースで話題になり、Twitter のトレンドに「郡道先生」が入った。次の日には謹慎処分を受けそのまま引退という運びだ。このモデルが今回取り扱った炎上事例の中で一番シンプルである。それは不適切発言から謝罪を行ったがそれだけでは批判が収まらず、大きな影響を出す前に謹慎処分を出し会社としては対策したという判断だ。

#### ケース II スーパーチャット強要

ケース I に続き郡道美玲の炎上事例について取り上げる。この件は 2020 年 11 月 18 日ライブ配信中のスーパーチャットのコメントを取り上げ批判し、そのスーパーチャットを送ってきた視聴者をブロックした。批判内容は少額のスーパーチャットで配信者の文句を言える傲慢さが気持ち悪いといった。19 日にはニコニコ動画にライブ配信の切り抜きが投稿されまとめサイト等で取り上げられることになった。以下の図が時系列でモデル化したものだ。

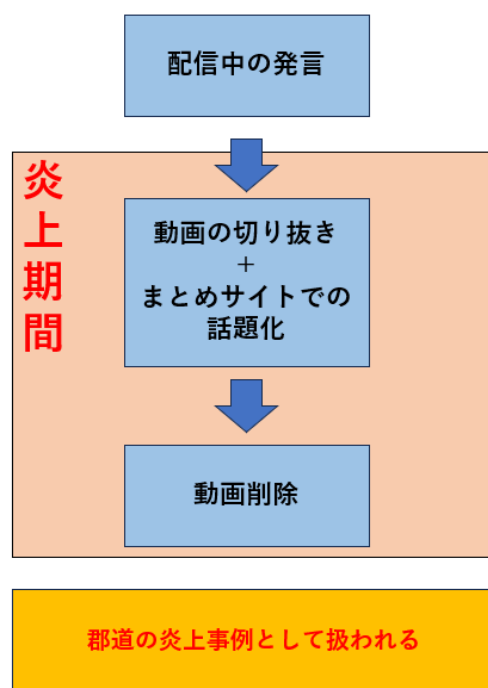


図 4 炎上モデルII

炎上の原因は配信中の発言になる。だが郡道美玲の配信スタイルとして過激な発言は多くファン歴が長い視聴者であっても気に入らない言動があればすぐにブロックするスタイルであるため、ライブ配信中にはさほど大きな問題にならなかった。だが、動画の切り抜きによって郡道美玲の視聴者ではない多くの人が見ることによって炎上として問題定義されることになり、まとめサイト等で炎上のタグが付き幅広く知られることになった。炎上問題に昇華された後郡道美玲が動画のアーカイブを削除。また彼女の配信スタイルから考えると日常茶飯事であったため長期間炎上することはなく今では過去の炎上事例の一つとして話題になるぐらいである。また炎上当時は郡道美玲に対する批判が多かったものの、彼女の配信スタイル、ネタとして扱われる話題であることを含め現在当時ほどの批判はない。

しかし VTuber に限らず配信者はスーパーチャット含む投げ銭に関して話題性が高く、ほかの配信者での問題に対し過去の事例として話題に上がることがある。

#### ケースIII同棲疑惑

VTuber の炎上事例と言えば歌手のまふまふを巻き込んだこの事例だろう。またこの炎上には別の配信者による炎上の促進が見られること、VTuber 特有の

事例が表れていると考えモデル化した。事件の発端は 2022 年 2 月 10 日元ホロライブプロダクション所属の潤羽るしあは同会社 VTuber のさくらみことのコラボ配信中に歌手まふまふからのメッセージが配信画面に映りこんだ。またその内容が同棲疑惑のある内容であったため Twitter のトレンドになりすぐに動画は削除された。まふまふ側から同棲の否定があったもののコレコレという暴露系配信者が潤羽るしあからまふまふとの関係について相談されたという動画を投稿しさらに話題性を持った。その後同月 14 日ホロライブ公式が潤羽るしあの対応に関して報告し誹謗中傷等は落ち着いた。が、19 日ライブ配信中にまふまふが「みけねこという YouTuber が潤羽るしあである」と示してしまったことにより再燃。その後 22 日にみけねこ ch というチャンネルが開設した後ホロライブ公式が 24 日潤羽るしあの契約解除をした。時系列でモデル化したものが図 5 である。

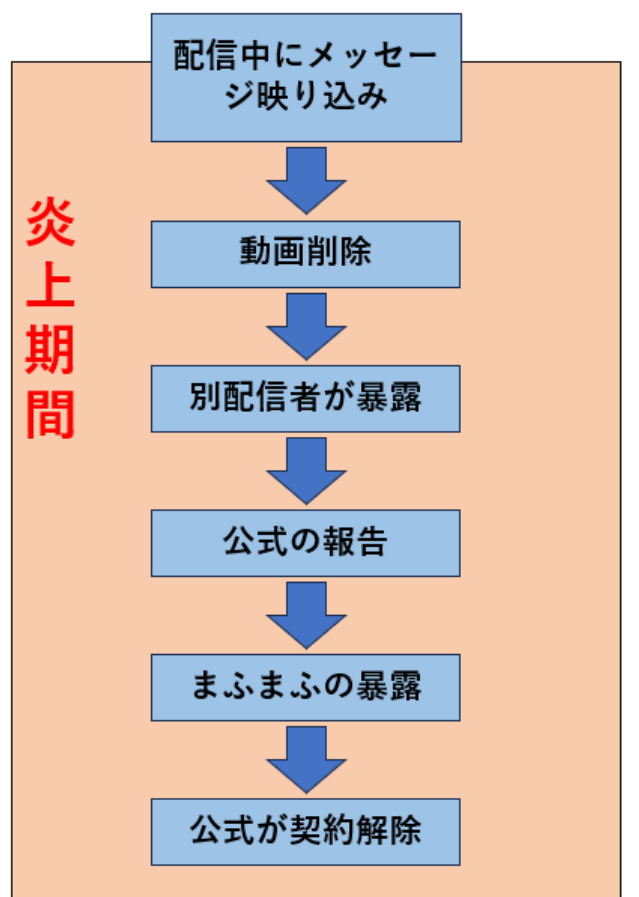


図 5 炎上モデルⅢ

炎上の原因は配信中の映り込みであり配信中の出来事であったが、内容が有名歌手との同棲疑惑であったため配信中にもかかわらず大きな話題になった。そ

の後まふまふ側から内容の否定があり、動画の削除を行い事象の解決を目指したが別配信者が情報を暴露したことにより様々な憶測が飛び交い話題性を持つ。ホロライブ所属の VTuber に対する誹謗中傷等を少なくするもしくは炎上を鎮火させるために公式から報告があったが、事態が鎮静化しなかったためまふまふが事情説明を行った。そのライブ配信で「みけねこ」という YouTuber が潤羽るしあであることを示した。VTuber の中の人に関しては非常にデリケートな話題であり、常に炎上の危険性を持っている。また VTuber、特にホロライブは所属 VTuber をアイドルとして扱っているため一般的なアイドル同様恋愛系の話題は炎上しやすい。結果として炎上が鎮静化されることなくホロライブ公式は別配信者に情報を漏らしたということで潤羽るしあの契約解除を行った。

#### ケースIV違法ダウンロード

VTuber は様々な事例で炎上している。しかしすべてがすべて引退もしくは契約解除することではなく、ケースIIのように動画削除やこのケースのように活動自粛を行い炎上が鎮静化するケースもある。本事例は 2022 年 2 月 27 日にじさんじプロジェクトのローレン・イロアスが配信中配信画面に PC のデスクトップ画面が映りファイルの中に違法ダウンロードされたものとみられるデータがあり話題になった。その後 Twitter にて弁明し否定したが、公式の事実確認により違法ダウンロードに関しては事実だったため約 2 か月活動自粛した。時系列でモデル化したものが図 6 である。

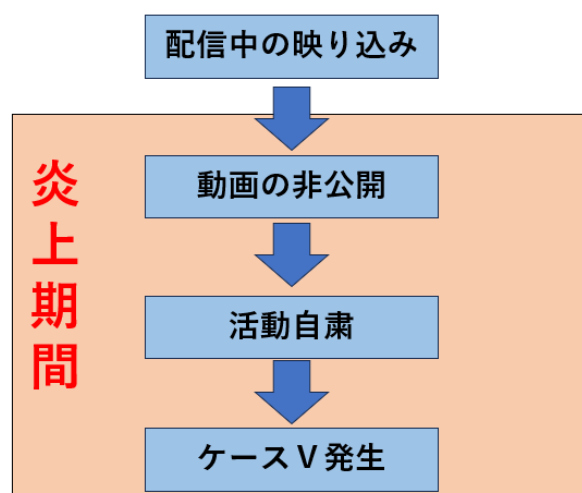


図 6 炎上モデルIV

炎上の原因は配信中の映り込みだったが、当初はそのデータがどういったものなのかわからず、また Twitter でも別のデータであると弁明していたこともあり配信後は炎上していなかった。しかし、そのデータが特定され違法ダウンロードされたものとわかってからは配信者が嘘をついていたことにもなり大きく広がった。また活動自粛後再度別の内容で炎上してしまい、その際にもこの事例が話題に上がり炎上期間が長くなっている。

#### ケースV ネットスラング

ケースIVの4か月後である2022年6月9日にまたローレン・イロアスは炎上することになる。コラボ配信中に「ファビヨる」という差別用語を使用し配信内で間違った意味で使用したと謝罪した。配信後謝罪ツイートをを行い自ら三日間活動休止を行った。図7はモデル化したものだ。

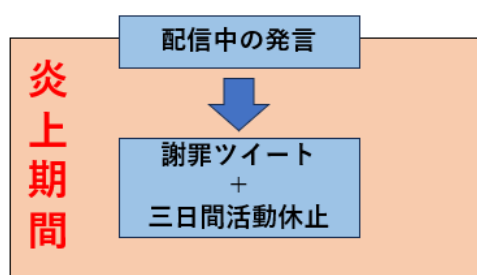


図7 炎上モデルV

炎上の原因は配信中の発言にある。今回の内容としては配信者が差別用語を使用したということで当初から一定の批判はあった。しかし早い段階で謝罪し、配信後謝罪のツイートも行っている。だが先のケースIVの炎上から4か月しか経過しておらず、以前にも不適切発言等が多かったためわざと炎上させる人が多く悪意のある切り抜きによって炎上が大きくなった事例になる。

以上炎上モデルからVTuberの炎上は今までの炎上とは違い、謝罪や引退、活動休止を行っても数か月間は炎上している状態が続く。収束後も該当VTuberが別事例で炎上した場合過去の炎上が再燃するケースや他配信者やVTuberが同様の内容で炎上した場合再度炎上するケースも少なくない。



## 第5章 考察

### 5.1 炎上モデルについて

5件のモデル化を行ったが、炎上の起点となった言動に関しては先行研究で小林（2011） [22]が6類型を提示していて（1）やらせや自作自演（2）なりすまし（3）悪ノリ（4）不良品・疑惑（5）コミュニティ慣習・規則の軽視（6）放言・暴言・逆ギレとなっている。また炎上の内容についても田中・山口（2016） [7]ではI型：反社会的行為や規則に反した行為（告白・予告）II型：なにかを批判する、あるいは暴言を吐く III型：自作自演・ステルスマーケティング IV型：ファンを刺激（恋愛スキャンダル） V型：他者と誤解されるといった5類型がある。これらは炎上のきっかけとなった言動を整理したものだがVTuberの炎上事例になりにくいものも存在する。例えばなりすましに関してはTwitter等のアカウントをなりすまししようとしても、他配信者や企業からの接点等の点から嘘が発覚しやすく、また企業に所属している

VTuberの場合、企業が詐欺行為として調査するため炎上事例になりにくい。2023年12月ローレン・イロアスのなりすまし事件が発生するも炎上ではなく事件として扱われた。逆にVTuberだからこそ炎上事例に上がりやすいものも存在する。それは疑惑と暴言等の不適切発言だ。VTuberはアバターを使用しているため、アバターを使用していない配信者よりも情報が少なく、あらゆることを視聴者側が想像して楽しむことができるという一種の文化・暗黙のルールがある。そのため秘密が多く、ありとあらゆる疑惑が生まれやすいのだ。また視聴者との関係性もアイドルとファンの関係性に近く、疑惑に対する批判が大きくなりやすい。また暴言等の不適切発言に関してもVTuberの配信内容はゲーム実況や雑談配信が多くそのほとんどがライブ配信である。そのため、録画配信とは違い動画の編集や加工ができないため不適切発言があっても削除できない。また動画配信者は様々なバックグラウンドを持っているためそれぞれの文化があり言葉の意味が一般的な意味と違うケースがありそのような点も炎上しやすい理由だ。また、VTuberの炎上は自身の不適切発言で炎上するケースも多いが、ファン以外の第三者の誤解によって炎上する事例もあり、ファンが炎上させる事例もある。

そのため炎上の起点内容だけでなく何が起点になったのかを1.自分自身の発言 2.第三者の発言 3.ファンの発言の3種類に分類分けした後内容に関して類型化

する必要がある。この際第3者とファンの違いとして、その配信者の言葉の意味や配信文化が分かる人をファンとし、それらが全く分からない人を第3者と定義した。そのため、配信者の投稿した動画を閲覧したかどうかは指標に入っていない。なぜなら、配信を見ていても独自の文化等が理解できないなら批判する際に誤解が生まれるからである。

これらを踏まえ先行研究の類型化を改善してVTuberの炎上類型化を行ったものが下の表になる。

**表 1 炎上起点の分類分け**

炎上起点の分類	
1	自分自身の発言
2	第3者の発言
3	ファンの発言

**表 2 VTuber 炎上の類型化**

VTuber 炎上の類型化	
①	悪ノリ・暴言・不適切発言（犯罪含む）
②	誤解
③	恋愛スキャンダル
④	業界のルール違反

表 1.2 より、炎上モデルを作成した5件は次のようになる。

**表 3 炎上モデルの場合分け**

炎上モデル	
ケース I	1-①
ケース II	1-①,2-②
ケース III	1-③,3-③,3-④
ケース IV	1-①
ケース V	1-①,2-①

表3よりケースⅠは1-①と自分自身の不適切発言で炎上しその内容が曲解されることもなく、第3者やファンに流れ拡大した。先に述べたように郡道美玲は暴言や独自の文化ネタが多いため、ファンの中には支持する声もあった。しかし、全体的に見て支持の意見は少数派であり謝罪ツイートを行うも過去の不適切発言が第3者により広められ炎上が大きくなってしまった。謹慎処分後も普段の配信で郡道美玲によっていきなりブロックされたファンや動画の切り抜き等を見ただけの第3者が話題に取り上げたため引退後も炎上している。

ケースⅡの炎上は1-①,2-②の二つが混ざり合った事例と言える。まず1-①の場合は図4より配信中の自身の発言が不適切発言として炎上していると見たものである。これはスーパーチャットに対して「気持ち悪い」と発言した後高額のスーパーチャットを強要したことが不適切発言となり要因になっている。現在この炎上事例に関して一般的解釈はこちらであるが、これに関して異議を唱えたい。それが2-②である可能性だ。確かにスーパーチャットに対して「気持ち悪い」等のコメントは行っているが内容を読み解くと、少額のスーパーチャットで配信者や配信内容に対して文句言う態度が「気持ち悪い」と言っているように感じる。またこのスーパーチャットの中に郡道美玲に対するセクハラネタも含まれているため、それに対しての返答ともとれる。配信スタイルから高圧的言動はいつものことであり、過激な発言を売りにしている郡道美玲が高額スーパーチャットを強要するのもファンからすれば普通とも考えられる。また別のVTuberでもファンに頼まれたから恐喝発言をする人は多く、VTuber文化を知れば知るほど語尾がどれだけ強くなるかとそういうファンサービスと理解されるものだと考える。そのため、それらVTuber文化を知らず、郡道美玲がどういう配信スタイルでキャラクターなのか知らない第3者が動画の切り抜き等を見て騒いでいるとし2-②も該当する。また炎上した媒体に関して当初はTwitterだけだったものの動画の切り抜きから第3者の批判が集まり、それらがまとめられニュースサイトに載ることで炎上が大規模化したと考えられる。ケースⅢは図5にあるようにたくさんの工程が含まれている炎上事例だ。その段階ごとに炎上パターンが違うのではないかと考えている。一般的にこの炎上で言われているのは1-③である。有名歌手との同棲疑惑とされTwitterのトレンドにもなり、大きく炎上した。加えて炎上の起点は配信中での映り込みで配信者のミスであるが自身の行動にて事件が発覚したため当然であるともいえる。だがそうなる公式の契約解除の理由として挙げられるのは恋愛スキャン

ダルだったのかと言われればそうではない。そのため図5の内容を振り返りながら、考察しよう。まず動画の削除までは潤羽るしあのみスで起こったことであり、これ以上大きな問題にならないように削除しまふまふ側も否定にとどめ潤羽るしあ側の企業ホロライブの対応を待っていると考えられる。しかしこの後別配信者コレコレが暴露動画をアップし事態は急変した。コレコレは告発系 YouTuber と言われており、事件に関して暴露しネットを荒らしている。コレコレは潤羽るしあからまふまふとの関係性について前から聞いていたとこのことでこの情報漏洩がホロライブ公式の契約解除の理由である。ただこれに関してコレコレはファンが憶測で話しているのが嫌だと潤羽るしあが言ったため同棲疑惑を否定したと話している。すなわちファンが批判してくる行為が嫌で潤羽るしあから相談されたということになる。この場合3-③の状況になっているといえる。これに関しては本気の恋愛感情を抱いているファン通称ガチ恋勢が VTuber 業界には多く恋愛スキャンダルが起こるとファンでも猛烈に批判するようになる。つまりファンの中でガチ恋勢が多い場合恋愛スキャンダルが起こると3-③の状況になりやすいのだ。潤羽るしあはホロライブの中でも愛が強いファンが多くまた、この炎上のひと月前に誕生日エンゲージリングを販売していることもあり炎上を加速されたのではないか。図5より公式の報告で潤羽るしあに対する誹謗中傷や批判をやめるようにと指示され、また公式が事実確認を行っている連絡し、多少は落ち着いた。しかしその後まふまふ側が生配信で話した内容がさらに炎上することになる。まふまふは女性関係に関して過去関係を持ったことがないと話していたためまふまふ視点でも批判は上がっていたため、それに関する弁明として生配信を行った。その中で潤羽るしあとは頻りに連絡を取り食事にも行く関係性だったと話し、潤羽るしあの前は「みけねこ」として活動していたと Twitter のダイレクトメッセージを公開し説明した。これが VTuber 業界のルールに反するものだと考えている。VTuber はアバターを使用していて当然中の人すなわち演者も存在するのだが、中の人か前何をしてきた人でどんな人だったのか明言するのはよくないとされている。これは VTuber を見て感じたイメージによりファンは夢を抱くからだろう。現実世界のアイドルに近いものだが、アイドルよりも VTuber は存在がアニメキャラに近いイメージの先入観が強いのではないか。そのため潤羽るしあという VTuber の中身は「みけねこ」という YouTuber だったことを受け

入れられずまた炎上したのではないか。そのため 3-④という状態になる。その後公式が契約解除を宣言した。

しかし今でもまだ話題に上がる理由は潤羽るしあはいなくなったものの「みけねこ」が配信活動をしていて、いろいろ過激な発言をしているからである。潤羽るしあとして人気が高かったためファン数自体は多く燻っている事例ともいえる。

ケースIVは今までの事例の中で最も簡単で炎上期間が比較的短い。1-①という自分のミスによって違法ダウンロードされたファイルが動画に乗ってしまい、内容としても犯罪行為であったため動画の非公開という処置をし、活動自粛という罰を受けた。ケースIと内容は同様だがこちらの炎上が短かった理由として、VTuberの人気度と不適切発言と犯罪の差ではないかと考えている。人気度に関してはファンとアンチの数が変わってくるため話題性に差が生じ人気のないVTuberは炎上しにくいと考えられる。不適切発言と犯罪の差に関して、犯罪は配信者側を擁護する意見が表れにくく、議論が発展しないワンサイドゲームになる。しかし不適切発言の場合、配信者を擁護する人が現れ、擁護派と批判派でまた炎上するため炎上に巻き込む人数が増え炎上期間が長くなるのではないか。

ケースVは図7より自身の不適切発言で炎上したとされている。しかし、この炎上には話題になっていない事実が存在した。それは配信内で本来の意味を指摘され謝罪していることだ。間違った意味で使用し配信内で視聴者に本来の意味を説明されすぐに謝罪をしている。だが、その配信後に挙げられた動画の切り抜きではその部分は削除されており、謝罪がないように見られるものだった。またローレンはその配信後すぐに謝罪ツイートを行っているものの第3者からの批判により炎上が起きてしまったものと推測した。差別発言に関しては言ったのは事実であるため1-①にも分類されるが、この事例に関しては悪意のある切り抜きやそれらを見た第3者からの批判が多いと考え2-①の側面もあると考えた。

また表3から第3者の発言によって炎上している場合炎上期間が短くなるのではないか。これは第3者が動画の切り抜きやまとめサイトを見て批判しているからだと考えている。動画の切り抜きは生配信の内容のうち該当箇所のみを取り出すことが多く前後の内容はない。そのため切り抜きした部分が悪ければ動画内で言った発言と全く違う意味で取られることもある。またまとめサイトは

動画の切り抜きから記事が作られていることが多い。まとめサイト作成者は VTuber 文化について詳しいケースもあるが、ほとんどの場合閲覧数を稼ぐため過激な発言をしていることがある。これらの発言や動画の切り抜きを見た第 3 者の批判はファンからすれば見当違いの内容で批判しているため反論が多く集まる。そのため炎上内容に関して否定意見が多くなり動画切り抜きやまとめ記事の削除によって批判が集まらず鎮火されるのではないかと考えている。

## 5.2 VTuber の特異性

炎上モデルを見ても分かるが一般的な炎上と違い、謝罪をしても収束するケースは少なく一つの炎上が長いということが分かる。ケース 1 に関しては炎上してから謹慎処分出るまでわずか 1 日だったが謹慎後引退するまで Twitter やまとめサイトで話題になっていた。また WBC の不適切発言以外にも群道美玲は過去に不適切発言と取られる行為もしているため、複数の行為が重なって大規模な炎上になったのだと考えられる。ローレン・イロアスの事例は近い時期に発生したため、炎上内容としては大きくなりにくい内容だったが互いに油を注ぎあい大きな事象へと変化した。また動画の切り抜きによる影響が強く、事実とは異なる悪意のある切り抜きが投稿されたため炎上は拡大化した。VTuber の動画コンテンツが比較的長いため動画内の発言を理解するためには長時間配信を見なければいけない。長い間配信を見なくても内容を理解するために動画の切り抜きは行われるのだが、悪意のある切り抜きが多く拡散されるようになった。通常デマであれば炎上する前に反論され話題にもならないのだが、VTuber の炎上ではライブ配信を見てない人が圧倒的に多いため、悪意のある切り抜きを見ても、それがデマだとわからず大量の批判が集まり炎上する。ファンの熱意が恐ろしく高いケースもあり、ファンが事実を証明しても第 3 者からはファンが推しの VTuber を庇っているようにしか見えずもっと白熱するのではないだろうか。

また活動引退してからも炎上の期間が続いたのは「転生」といった VTuber 業界独自のルールがあったからだと考える。VTuber はアバターを使用した配信者なので一般的な顔出し配信者よりも秘匿性が高い。また中の人が誰なのか明確にすることは業界のタブーとされているため、VTuber を引退した人が誰だったのかはわからないとされている。だが、稀に引退した VTuber の中ですぐに別の VTuber としてデビューするケースがある。それが「転生」といわれ

るのだが、この制度があるため炎上しやすいのではないかと考えている。例えば顔出し配信者が不適切発言をし炎上後引退すると、デジタルタトゥーとして個人情報や炎上履歴が残ってしまう。そのためまた動画配信をしようと思ってもマイナスのイメージを持たれたまま活動することになる。しかし VTuber の場合、中の人情報が残るわけではないためすぐに新しいアバターを使用して戻ることができる。加えて確かな情報ではないが過去に炎上した VTuber が「転生」して配信しているといったケースもあるため、引退ぐらいでは制裁になってないのではと思われている可能性から引退後も炎上しているのではないか。

### 5.3 今後の課題と展望

本論文では VTuber の炎上を再定義し、問題発言が起こってから時系列で何が起こったのか明確にした。今後の課題として、本研究の対象外である V ライバーの炎上に関して研究を行うことでアバターを使用した炎上問題への理解が進むのではないか。また炎上加害者や被害者にヒアリングを実施し、炎上当時の心情等を把握できれば今後の炎上リスク軽減につながると考える。

VTuber は独自の文化と情報の秘匿性、ファンとの関係性といった面で特異性があり、その特異性が炎上に大きく関わっていることが分かった。この特異性はデメリットを抱えているものの、VTuber が発展した特徴でもある。今後も特異性を理解したうえでさらなる発展と問題対策を考えていきたい。

## 謝辞

本研究の指導教官である西村拓一教授、伊集院幸輝特任助教、押山千秋特任講師から研究への多大な助言、熱心なご教授の数々をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。また、共に研究生活を送り、研鑽しあった修士 2 年生の同期である朝枝氏と修士 1 年生の金岡氏にも御礼申し上げます。

最後に 2 年間の大学院生活を経済的、精神的に支えてくださったご両親にも深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- [1] NTT ドコモ, “スマートフォン比率,” モバイル社会研究所, 10 4 2023. [オンライン]. Available: <https://www.moba-ken.jp/project/mobile/20230410.html>. [アクセス日: 16 1 2024].
- [2] weblio 辞書, “炎上:weblio,” weblio 辞書, 21 1 2014. [オンライン]. Available: <https://www.weblio.jp/content/%E7%82%8E%E4%B8%8A>. [アクセス日: 16 1 2024].
- [3] 平井智尚, “なぜウェブで炎上が発生するのか-日本のウェブ文化を手がかりとして,” 情報通信学会誌, 2012.
- [4] 荻上チキ, ウェブ炎上-ネット群衆の暴走と可能性, ちくま新書, 2007.
- [5] 吉野ヒロ子, “ネット炎上を生み出すメディア環境と炎上参加者の特徴の研究,” 中央大学, 2018.
- [6] C. L. L. a. T. A. Thurlow, Computer Mediated Communication: Social Interaction and The Internet, SAGE, 2004.
- [7] 山口真一, “ネット炎上の実態と政策的対応の考察—実証分析から見る社会的影響と名誉毀損罪・制限的本人確認制度・インターネットリテラシー教育の在り方—,” 総務省情報通信政策レビュー, 2015.
- [8] 清水千夏・渡邊慎二, “アバターの外見と動きとその印象に関する研究,” 日本デザイン学会デザイン学研究, 2021.
- [9] 市. 井. 横山ら, “身体的アバタを介した自己開示と互惠性 —「思わず話してた」—,” 情報処理学会, 2022.
- [10] 西野順二, “VTuber 文化におけるいくつかのエポック,” 第 38 回ファジィシステムシンポジウム 講演論文集, 2022.
- [11] 越後宏紀・呉健朗・新井ら, “カテゴリ別における VTuber と YouTuber の配信スタイルによる印象評価,” 情報処理学会論文誌 Vol.64 No.1 86–95, 2023.
- [12] 佐藤慎, “バーチャル YouTuber におけるイメージと身体,” 早稲田大学, 2021.
- [13] 総務省, “令和元年版ネット上での炎上をめぐる議論,” 総務省, [オンライン]. Available: <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd114300.html#:~:text=%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%86%E3%82%B9%E7%A4%BE%E>



3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E7%82%8E%E4%B8%8A%E3%81%AE,%E3%81%A6%E3%81%84%E3%82%8B%E3%82%82%E3%81%AE%E3%80%8D%E3%81%. [アクセス日: 16 1 2024].

- [14] 難波優輝・大澤博隆, “バーチャル YouTuber という実験場 —コミュニケーション, インタフェース, フィクションの交差点—,” 人工知能 38 巻 4 号, 2023.
- [15] 武田太一・濱崎雅弘, “SNS データを用いたバーチャル YouTuber 探索支援システムの提案,” 人工知能学会全国大会 (第 35 回) , 2021.
- [16] 北川俊作, “学術系 VTuber のススメ,” 応用物理, 第 巻 92, 第 10, pp. 633-635, 2023.
- [17] 大西裕也・黛礼雄・田中ら, “疑似的な手繋ぎを再現するロボットハンドの開発,” 第 89 回 言語・音声理解と対話処理研究会, 2020.
- [18] 橘健太郎, “コーヒブレイク-バーチャル YouTuber と声質変換,” 日本音響学会誌, 第 巻 74, 第 6, p. 354, 2018.
- [19] 岸. 頼紀, “ソーシャルメディアのリスク,” 電子情報通信学会通信ソサエティマガジン, 第 巻 13, 第 4, pp. 264-269, 2020.
- [20] 岩崎祐貴・折原良平・清ら, “CGM における炎上の分析とその応用,” 人工知能学会論文誌 30 巻 1 号, 2015.
- [21] 水村典弘, “不適切な広告表現の研究— 人種・性差別的な表現で炎上した事例の分析 —,” 日本経営倫理学会誌 30 巻 p. 61-74, 2023.
- [22] 小林直樹, ソーシャルメディア炎上事件簿, 日経 BP 社, 2011.